

## 第一週

一つの談話材料をましまつた形で話しすることは、さうしても入園最初の日から二三日を経てからでないで始められない。この二三日、紙風船で遊ぶとか、コマ(年長組から貰つた紙の)を廻すとか、遊戯を見せて貰ふ、繪本を見る、等の、是等の間で、保姆はつめて個人對の話し合ひの機會をなるべく多く持つ。

斯うしてゐる間に、まづ新入園児一人づゝの姓名をしつかり覚えこみ、又誰々は附添の手を離られる、誰は離られない、さういふ事を見きはめておく。名を覚えてしまひ、附添如何が大體わかつてから、第一の話を始める。

ボコボコ

最初に擧げるこの話を、こゝにもつて來たわけは、内容よりも、題名のボコボコいふ名稱である。先生から、「ボコボコ」いふお話を上げてませうね云はれて、是れを

聞いた幼児は、發音からくる弾力性も、可笑しみによつて興味をひかれる。この話は是非題名を先に示す。話の終る迄度々繰り返されるこの、ボコボコを軽く面白く發音する。内容から云へば、お母さんの留守の間に、一寸いたづらをするさういふ、自分達と同じ年頃の、こもすれば、不可ない云はれたいたづらをしたくなる幼児にまつて、始めて聞いても、この話の簡単な筋もよくわかるらしい。いたづらをしたから云つても、その報いが、叱られたり、お土産が貰へなかつたりすれば、現實的になり、教訓味が強いけれど、さう考へても、現實には無さそうなボコボコしか云はれないさういふ意想外な報いは、その點があつさりして居ていゝ。

富子さんの風船

この話も入園最初の幼児に話すよい材料で、前のボコボコさういふを先にしてもよい位である。富子さんが叔母さ

んから風船を頂きましたよ云ひ出せば、最も親しみのある風船といふこゝにまつ興味をもつ。次に風船を吹く身振り、保姆は兩手を丸く風船の形にして、口の近くにもつてゆき吹いて見せる。段々手の丸さを大きくしてゆく、こゝを幾度も繰返す中に、中には無意識に自分でも吹いてゐる幼児がある。かうなれば樂に話が出来る。

次に風船につられて、富子さんも兄さんも、魚屋さんも、みんな空へ空へこ上つてゆく、この引ずられてゆくこゝろを手振り以示す。

この話は言葉だけでは面白く運べない、殆んど身振りの方を多くして現さねばならない。

きいて居ても餘程面白いらしく、この時期には二三度くり返してもよい。

大きな球のはなし

猿、犬、猫その他出てくるもののがかなり多いけれども、一つのこゝろが、繰り返されてゐるので複雑しない。一つの行動の繰り返しが、この話の新入園期に適してゐる所以である。更に、キャンニャーワンチウコケッコの啼聲の連

續は、ポコポコと同じく發音からくる面白さに惹かれて喜ばれる。

この頃になれば、大分慣れて来て、附添のついて居るものは段々少なくなる。ゐても特別な三四人になるであらうが、まだ／＼それ自體の目的よりも、互ひに親しみをまましてゆく一つの手段として扱はねばならない。形では組全體でも、心の中では一人一人へ話しかけて居る心持ちである。さうかするに面白い話一つで、思はず附添を離れて、ふらふら先生やお友達の傍へ来てしまふ例も少なくはない。

## 第二週

小さい小さい叔母さん

小さい小さい叔母さんの次々の動作は、幼児の想像力を十分に働かせる。話をするよりも讀んでかせる方がいゝ。ごく靜かに。話すならば、餘程言葉なり、筋なりをよく覚えてしまつてからでないさ、却つて折角のこの話の肝心な心づかひを破るこゝになる。最後のコトンといふ音は、何の音であらうかさ、各自に聞いて見るのもいゝ。發表型の子はもう發言して、自分の考へた何々さ答へるであらう。

舌切雀天狗喰ひ

この邊で始めて人形芝居を見る。明日は又附添き一日中離れられないやうな子でも、この一三時、さみしさも、頼りなさも忘れてしまつて、自分一人になつて見物する。そこを覗ふのであつて、十分堪能させるには、年長組一組、年少組一組位の少人数が、一室で靜かに見る程度。

### 第三週

猫のお見舞

病氣になつた猫を、大きい犬と小さい犬が見舞に行くさいふ、まことに心やさしい話である。大きい犬の動作のすべてが大きく、小さい犬はすべて小さな動作で、聞いてゐる幼児にはつきり會得出来る程の大小の差をつけるのが

観  
察

### 第一週

幼稚園内各室、幼稚園の庭、これ等はこの時のこの子供

いゝ。

天長節

前日に、明何日は天長節であること、或は靖國神社のお祭りであることを知らせる。何の日で休むかを知らせ、まだ委しい説明はしない。聞かせるばかりではなく、「天長節」、「靖國神社のお祭り」を各自に發音させる。

### 第四週

牝鶏と猫

牝鶏がわがひよこを強く愛する方を主とし、特に猫を悪者あつかひせぬやうに。但し猫が蛇の卵でびつくりする驚きをうまくあらはしたい。

達が家庭以外に始めて生活する場所なのである。生活訓練の方で皆説かれてゐる事である故観察として改めて言ふ迄